2106　離島覚書（長崎県・蕨小島）

久賀島の折紙展望台から蕨小島を望む

令和３年６月 24 日

チャーター船

蕨小島は久賀島（ひさかじま）の北東に位置する蕨集落の目と鼻の先にある。面積は 0.03 km ^{2}、周囲が 1.8 kmのきわめて小さな島だ。奈留海峡に面し、反対側に奈留島が横たわる。かつては干潮時に歩いて渡れたが、航路浚渫によって今は船を使わないと渡れない。こんな小さな島だから定期船は通っておらず、島に渡るためには船をチャーターしなければならない。

蕨集落に渡船業者がいれば時間も費用も少なくて済むが、事前に調べたところでは、蕨集落に渡船業者はいなかった。日本離島センター発行の「シマダス」に書かれている海上タクシー・長久丸に予約を入れた。長久丸は蕨集落のちょうど反対側にあたる田ノ浦漁港を拠点に活動している。

当初は６月 25 日に蕨小島を訪問する計画にしていたが、この日は長久丸に別の予約が入っていて都合が悪く、24 日の夕方に訪問することになったものだ。

福江島の奥浦から木口汽船の「フェリーひさか」に乗り、17 時すぎに久賀島の田ノ浦漁港に着いた。漁港に長久丸が待機しており、すぐに乗り換えて蕨小島に向かう。田ノ浦は久賀島の南西に、蕨小島は北東に位置することから久賀島をちょうど半周することになる。所要時間は 30 分と言われた。長久丸は 20～30 人は乗れそうな大きな船だ。船を１隻借りることになるので、乗る人が多ければ１人分の運賃は安くなるのだが、１人だからといって安くなるわけではない。船は想像していた以上に大きいので料金をいくら取られるのか心配になってきた。じつは福江島の銀行でお金を引き出しておけばよかったが時間的余裕がなく、持ち合わせが少なかったからだ。不安の中の出発となった。

大きな船だけに船足は早い。久賀島の南部を回って奈留海峡に入り、蕨地区に予定通り 30 分ほどで着いた。蕨小島は蕨漁港の前に位置し、島の北西側に築かれた防波堤の内側に船溜

まりが形成されている。船溜まりには漁船３隻、船外機２隻の他に、魚を活かしておく生簀が置かれていた。

チャーター船・長久丸（左）、蕨小島の船着場（右）

日本一小さな有人島

家の前は埋め立てによって造成された漁具干場になっており平坦だ。長久丸の舳先が岸壁に着けられ、蕨小島に飛び降りた。長久丸は後ずさりし、島の沖で待機することになった。すでに 17 時 30 分を回っており、日没前には田ノ浦漁港に戻りたかったのであまり時間がない。取り急ぎ島民に会うべく漁具倉庫をのぞくと、刺網の修理をしている人がいた。突然見知らぬ人が上陸してきて話しかけてきたので相手はビックリするのではと思ったが、意外にも笑顔を絶やさず、話に応じてくれた。刺網の主は小島さんといった。

蕨小島は北西と南東方向に細長く、山は平坦で台地状をしている。この台地では以前農業が営まれていた。人家は島の西側の南半分に形成され、家と漁具倉庫などの建物が 10 棟ほど山際に沿って並んでいる。人家と漁具倉庫の間には小さな家庭菜園があり、トマトやスイカがつくられていた。

小島さんによると、蕨小島は人が住む島の中では最も小さいという。そのためマスコミからの取材申し込みがたびたびあるそうだが、興味本位に扱われることを嫌って拒否しているそうだ。島から帰って確認すると、日本の有人離島の中では最も小さい島であることは間違いなかった。蕨小島に次ぐのが中通島の属島である桐ノ小島の 0.04 ㎢である。

この蕨小島には小島一族の３兄弟が暮らす。話を聞いたのが長男の方で 1947 年生まれというから私と同学年の団塊の世代である。次男と３男のそれぞれの家族あわせて９人が現在島で暮らしている。

蕨小島には後述するように小島家だけが代々住んできた。島は私有地のようなものだ。公共施設はないし、商店ももちろんない。何か必要なものがあれば久賀島に出かけることになるが、久賀島にもまともな商店がないから、基本的には本島である福江島まで行かなければならない。ただ後述する漁獲物の出荷先が福江島で、所要時間も 30 分強なので、それほど不便は感じないのだろう。

島には海底ケーブルで電気が通っているし、海底送水管も久賀島から敷設されている。つまり生活する上での基本的なインフラは整備されており、不便を感じさせない。唯一の心配は急病になった時ぐらいであろう。

蕨小島の人家（左）、狭い土地で作られている家庭菜園（右）

復活キリシタン

小島家のルーツは 1800 年前後（江戸時代後期）に大村藩の外海（そとめ）地方から移住してきた潜伏キリシタンであった。

五島藩の移民受け入れ政策によって、多くの潜伏キリシタンが海を渡り、五島列島の各地に分散した。その頃、久賀島には外海地方からの移住者が島内各地に来ているので、蕨小島への移住も同じ時期だったと思われる。移住者は先住民である「地下（じげ）」の人々が住まない不便な土地を開墾して自給生活を営むことになるが、蕨小島はそのうちの１つだったのである。今から 220 年ほど前のことである。

久賀島の蕨集落は海に沈んだ高麗島から移住してきたとの伝説が残る「地下」の集落である。したがって外海地方からの移住者は蕨集落に住むことができなかったので、その前にある無人島を開墾地として選び、居付いたのだろう。そして何代にもわたって半農半漁の生業を続け、今日に至っているのである。

小さな島への移住は奈留島の前島と同じだが、前島の場合は禁教時代の日本型に変質した土着宗教であるカクレキリシタンの組織・元帳を維持していた。一方、蕨小島は明治維新後禁教令が解かれ、再来日した宣教師に感化されて復活キリシタンになっている。つまり潜伏キリシタンは明治維新後の解禁後、カクレキリシタンと復活キリシタンに分かれるが、前島は前者、蕨小島は後者ということになる。

蕨集落は「地下」の人々の集落で仏教徒だったため、地理的に近いにもかかわらず蕨集落と蕨小島の間は疎遠だったと思われる。むしろ蕨から数㎞南に五輪（ごりん）という集落があり（歌手の五輪（いつわ）真弓の父親の出身地）、こちらの集落は蕨小島と同様、潜伏キリシタンから復活キリシタンになっていた同じ仲間であるから親密だったようだ。ちなみに五輪の集落は蕨小島に較べればはるかに大きな集落であったが、人は次々と去り、現在は２世帯ほどが漁業を営んでいるだけだ。この地には旧五輪教会堂と新しく建てられたカトリック教会が置かれており、教会を見に来る観光客が多い。

外海地方からの移住者は平民であったから江戸時代まで姓を持たなかった。明治維新後に「平民苗字必称義務令」が発せされると、全日本国民は苗字をつけなければならなくなる。蕨小島の小島さんは明治時代になって姓をつける必要が生じ、蕨小島に住んでいたことから小島を名乗ったのではないかと推察される。

魚類養殖から小漁師へ

外海地方からの移住者である小島家は山の台地を開墾して麦やサツマイモを作り、海で魚や貝を獲る半農半漁の生活を営んできた。しかし 30 年ほど前から農業をやめ、漁業専業になった。その結果、先祖が開墾した台地上の農地はすっかりもとの山林に戻ってしまっている。

専業漁師になったことで、小島家の人々は五島ふくえ漁業協同組合久賀支所に所属する組合員になっている。正組合員は長男、次男、三男と長男の妻と息子の５人で、残りの家族３人が准組合員だ。

小島家は、ハマチ養殖の技術が普及し、餌のマイワシ資源が豊富だった 1980 年代まで会社を組織し、ハマチ養殖を営んでいた。しかしマイワシ資源の減少と餌の価格の高騰により、ハマチ養殖の経営が厳しくなると撤退し、漁業に戻っている。現在は、兄弟で小型定置網を２ヶ統もち、刺網とイカ釣りなどの釣りを組み合わせて操業している。定置網では島の周辺に回遊してくるブリ、アジ、イサキ、ヒラマサなどが獲れ、雑刺網でカレイ類やマダイなどが漁獲される。

漁獲物は自ら漁船で、福江市の魚市場に出荷している。

外海地方からの移住者である潜伏キリシタンの集落は、高度経済期に人口流出が進み、あるいは集団移転によって廃村になっているところが圧倒的に多い。蕨小島のように小さいながらも 220 年にわたって住み続けている例は少ない。その理由が何処にあるか考えてみたい。

高度経済成長期以前であれば、それほどお金がなくても自給自足により生活できたが、貨幣経済化が一層進むと、自給作物から換金作物に転換しなければならなくなった。しかし、山間部の険しく条件の悪い土地しかなかった「居付」の集落は換金作物に転換することが困難だった。一方、海で稼ぐことができる地域は人数的にも限られていたので、生活するためには島を離れ、都会で就職するしか道はなかったのである。

蕨小島は農業がだめでも漁業で収入を確保できた。少人数で競争相手が少なかったから配分される水産資源も十分確保できる水準にあったのである。

刺網の準備をする小島さん・長男（左）、刺網を取り込む次男（右）

蕨小島の滞在時間は 10 分ほどだった。手短じかに話を聞き、17 時 50 分に蕨小島を去った。18 時 19 分に田ノ浦港に戻り、この日の宿泊予定地である久賀島の深浦に向かった。